

巨大古墳の出現と時を合わせるように銅鐸文化は消滅しました。天孫族の九州から大和への侵出は“神武東侵”に象徴されるように“民族戦争”であり、敗者である銅鐸の民は、巨大古墳作りの労働力とされた、と考えられています。

●「銅鐸の民」の概念をなしでは、弥生時代の理解は不可能です。

弥生時代の終わり頃、おびただしい数（500個以上）の銅鐸を置き去りにしたまま忽然と「去った、人々がいました。彼らの行き先を探し悲劇の結末を知っていただくとともに、古墳時代を探ります。

さて、以前NHKの『日本人はるかなる旅：2000年放送』という番組を見て、弥生時代の項に銅鐸の“ど”の字も出てこなかったことを覚えています。

また2023.12.6 NHK BS FRONTIERSでは、DNA研究成果によりますと、縄文から弥生、古墳時代にかけて（三段階渡来説）、弥生と特に古墳時代には、多くの渡来人がやって来たといえます。そしてついに古墳期にはDNAが現代人とほぼ同じとなったと発表されました。が、やはり銅鐸の“ど”の字も出てきませんでした。

「銅鐸を使って情報のやり取りを共有していた人々」。その主人公の人たちを「銅鐸の民」とします。彼らは紀元前四世紀ごろから、中国の戦国時代に大陸を追われ、戦争難民となって海上をさまよひ、東シナ海の海流に乗って西日本のおもに九州西部・北部、山陰の日本海側に辿りたどり着いたといわれます。

いわば“ボートピープル”として、はるか彼方から命がけで流れ着いたわけですから、一度に大挙して漂着した可能性は低いと思います。これは古墳時代まで続いたか事がDNA研究成果によりわかりました。しかし初めのうちは海岸近辺に仮住まいを作って、そこを拠点にして不安定な難民生活を始めたと思われれます。

弥生時代前期の終り、中期の初め。BC二〇〇年前後の弥生時代中期の初まりの時期にすくなくとも福岡県あたりで大激変があったと考えられるのです。

その背景になったのは、壱岐・対馬の人々が大陸・朝鮮半島から金属器を手に入れた人々。

その金属器を持っているほうと持っていないほうとでは、武力が段違いに違うわけです。もちろん彼らは海洋民ですから、当時でいちばん早く物や人を運ぶ船というものを持っているわけですから、そこに鉄や銅の武器を持っていると圧倒的な武力の差を生じることは容易に考えられます。その状況の中での征服・被征服があったという事になります。

この頃大陸では、秦漢から隋唐への時代と言えらると思います、日本国（倭国）への影響が極めて大きい環境「中国」の歴史を詳細に見ると朝鮮半島へ日本列島へ押し出された民族による征服・被征服があったという事になります。

有史以来、中国の漢民族は北方遊牧民族の侵入の脅威に晒されてきました。秦（B.C.21～210年）の始皇帝が初めて華北・華南の全土を統一したとき、最初に行った仕事は「万里の長城」の建設であり、北方の異民族を漢の地に入らせないためです。「長城の建設」と、これを維持して「異民族の侵入を阻止し続ける」ことは、漢民族にとって膨大なエネルギーを必要としました。しかし、漢民族が華北・華南を独占支配して生き抜くには、この仕事から手を抜くことは出来なかったのです。

この「北方異民族と漢民族の対立の構図」が中国の歴史を形成した。北方遊牧民族は長城の北を女房・子供を連れて移動し、移動の最中は、野菜なんかは自分で作ります。羊肉だけでは生きていけません。しかし、土地が悪いからちゃんとした農業は出来ない。で、彼らにしてみれば、長城の内側は垂涎の的である。彼らは農業の出来る土地が欲しい、出来れば定住したい。だから侵入すると、農民を殺して土地を奪う。漢民族同士の争いではこうはなりません。土地に張り付けられた農民の支配権を争うのであって、農民を殺したりはしません。異民族の侵入の場合はここが違います。

始皇帝が死ぬと漢に変わり、漢大帝国の支配は安定して人口は急激に増え、ピーク6000万人近くに達する。しかしその漢も、北方異民族の匈奴に押されて落ち目に向かい。政権が成熟して安定期に達すると後は落ち目に向かい。そのとき必ず北方の異民族が絡んでいる。中国の歴史はこの繰り返しだと云えます。

漢帝国が停滞期に入った所で、政権の実力者王莽が、改革を期待する声を味方につけて実権を握り、新（8～23年）を興す。しかし、圧倒的支持を受けて登場した王莽も、余りに出鱈目な政治を行ったために人口は半減。その王莽も殺され、光武帝の後漢（25～220年）に代わる。人口も回復するが、前漢までは戻らぬところで、また落ち目に向かい、黄巾の乱（184年）で事実上消滅します。各地の軍閥が、いずれは自分が皇帝になるんだと税金を懐に収め、後漢の中央政府は収入が無くなり崩壊しました。

この間に力を付けたのが黄巾の乱を制圧した軍閥の曹操で、曹操は侵入してきた北方の異民族を自分の部下に組み入れ、土地の所有を許して耕作させ、必要時に自分の軍隊として使った。これが屯田制で、この屯田制によって曹操は力を蓄える。このとき後漢最後の皇帝は有力者を頼って放浪していたが、曹操が見つけて保護し、最大限、大義名分に利用する。曹操が死ぬと、息子の曹丕が仕上げをする。この皇帝（獻帝）から禅譲を受けて魏を興したのであります（220～265年）。これを見て、呉、蜀も独立し、三国時代になる。

このとき、戦乱によって疲弊した人口は、漢の最盛時の10分の1の500万人程にまで落ちていたという。魏が半分の250万、呉が残りの3分の2の170万、蜀が3分の1の80万である。

漢民族の人口が減ると、北方で対峙する異民族との間の人口バランスが逆転し、国境は見渡す限り無人の荒野となり、そこへ大挙して北方の異民族が侵入して来る。曹氏の魏は、

この北方異民族との戦い、漢民族の蜀、呉との戦いの中で、部下の実力者、司馬炎に乗っ取られ、晋に代わる（西晋王朝 265～316 年）。

晋はやがて全土を統一するが（280 年）、北方異民族に圧倒され、30 年余で匈奴に倒される（316 年滅亡）。難を免れた王室の一族は華南に逃れ、遊牧民に土地を追われた農民も華南に逃れて合流し、東晋王朝（317～420 年）を建国する。漢民族不在となった華北には続々と北方異民族の五胡（匈奴・鮮卑・氐・羯・羌）が侵入して来て、土地の争奪戦を繰り広げる。これが五胡十六国時代である（316～439 年）。

この北方民族大移動の背景には、彼らの居住地の乾燥化、砂漠化があるようです。彼らは元の土地に住めなくなったのである。華南では東晋王朝（317～420 年）が百年続くが、この百年間、華北では五胡十六国の殺し合いが続く。やがて華南の東晋は部下に乗っ取られて、宋王朝（420～479 年）に変わり、華北では鮮卑族の北魏が五胡の統一を果たす（439～534 年）。

以来、華北では鮮卑族の王朝が北方諸民族を支配し、華南では漢民族の王朝が漢民族を束ね、双方が全国制覇を期して対峙する。この南北対立の時代が南北朝時代と言われ（439～589 年）、北朝の隋が南朝の梁を滅ぼしてこの対立に終止符を打つ。

さて日本国（倭国）に話を戻しますと、因果はめぐるものです。古墳時代になると中国大陸の戦乱によって、今度は、銅鐸の民の上に、列島進入後約四〇〇～六〇〇年の間に、青天の霹靂が襲いかかります。先にこの列島の先住地から追い出された縄文人の悲劇をはるかに上回る惨劇が、彼らの頭上に降り注ぐこととなります。これが、メインテーマ「戦慄の古墳時代」の正体なのです。謎に満ちた名前“古墳時代”なる、ベールに覆われた恐るべきわが国古代の真実を、白日の下に曝すこととなります。

●弥生文化最大の特徴は、本邦初の金属器（青銅器）の開化です。銅鐸について整理します。

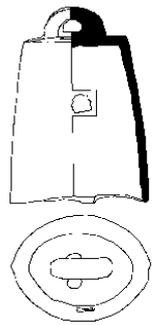


(上図の鈕分類は、本来ゆり鳴らすベルとして半環状のつり手に注目し4つに大別。)

銅鐸の紋様

銅鐸には何らかの紋様が鋳込まれています。銅鐸の祖形として有力なものに朝鮮小銅鐸(ちょうせんしょうどうたく) (右図) がありますが、朝鮮小銅鐸には紋様がなく、銅鐸はわが国で独自の紋様が鋳込まれ成立したものです。

銅鐸紋様はすべて鋳型面に刻み込まれた凹線が、青銅を鋳込むことによって凸線となって浮かび上がり、紋様や絵となって表わされます。



絵には線画によって表現されるものと幅広い線や面を鋳型に刻み、陰影様に浮き出す表現方法がみられますが、紋様はほぼ一様に線画で刻まれ、表現手法に違いがあります。

身にみられる紋様は、横方向の区画帯を用いた「横帯紋」(おうたいもん)、縦横に区画帯をめぐらせた「袈裟襷紋」(けさだすきもん)、平行直線紋を屈曲反転させた「流水紋」(りゅうすいもん)の大きく3つに分類できます。

また、身の区画内には「斜格子紋」(しゃこうしもん)を多用し、横帯には「綾杉紋」(あやすぎもん)や「斜格子紋」「連続渦巻紋」(れんぞくうずまきもん)を、縦横帯が交差する部分には稀に「木葉紋」(このはもん)や「重弧紋」(じゅうかくもん)などを配置します。

鈕の外縁から鱗にかけてはふつう「鋸歯紋」(きよしもん)をならべます。鈕外縁には「鋸歯紋」「渦巻紋」(うずまきもん)「重弧紋」(じゅうこもん)などを、断面が菱形の菱環部には多くが「綾杉紋」を施しています。鈕の内縁は無紋とするか「鋸歯紋」や「重弧紋」を配置します。

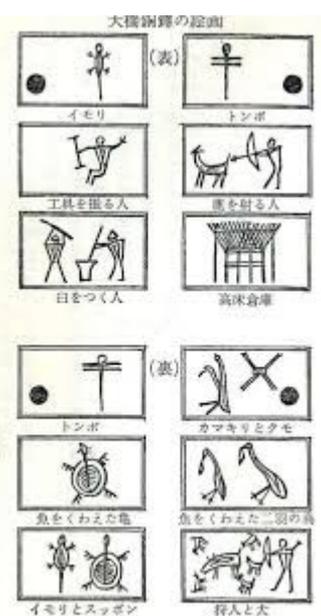
身の下部は「下辺横帯」(かへんおうたい)と呼ぶ横帯で仕切り、ここには「鋸歯紋」「連続渦巻紋」などをならべ、裾(すそ)とよぶ下部には紋様を施しません。

銅鐸の絵

絵は、初期の銅鐸から認められますが、銅鐸全体からすると3割程に過ぎません。



国宝銅鐸として有名な伝香川県出土銅鐸(左図)、神戸市桜ヶ丘4号・5号銅鐸、出土地不詳谷文晁旧蔵銅鐸の4つの銅鐸は、ほぼ似通った絵と構成をもつことから、同じ作者によってつくられた一連の作だと考えられます。この銅鐸よりも更に古い時期につくられた福井県井向(いのむかい)銅鐸もよく似た画題が描かれています。このことから銅鐸の絵には弱肉強食や農耕賛歌といった一連の物語がうたわれているとする解釈が有力です。



銅鐸の鑄造

銅鐸は銅と錫(すず)の合金「青銅」で造られ、これに少量の鉛(なまり)が含まれていま



す。銅は融点が1084度と高く、溶解するためには1100度以上の高温を要します。そのため、融点の低い錫(231.8度)、鉛(327.4度)を混ぜることで、より容易に鑄造を行ったと考えられます。成分比率は銅が全体の8~9割を占め、錫は10%あまり、鉛はごくわずかで特に比重が高い鉛は少量が混入されたとみられます。出土した鑄型などから扁平鈕式古段階までの銅鐸は、外型に石の鑄型を使用し、扁平鈕式新段階以降は

土の鑄型が用いられます。 写真：銅鐸の復元鑄造：神戸市桜ヶ丘12号銅鐸

重要なのは技術的難度の極めて高い青銅製の武器生産を始めたことです。とりわけ銅鐸の発明を成し遂げたことが最大の成果と言えます。銅や鉛、錫の鉱脈を探すプロがいたことは自明のことでしょう。銅鐸は日本列島初の金属音の発明であり、その鋭い高音は仲間同士を知らせあったり、敵(縄文人)を威嚇し、駆逐するのに使われたと考えられます。縄文人は戦争をしない民族だったので、縄文遺跡からは武器が発見されていません。それは、人口密度が低かったため、氷期が終わってから、絶海の孤島と化した、何千年もの縄文時代のあいだ、民族紛争の火種となるような相手が近くにいなかったからです。

新たな侵入者(銅鐸民族)たちは、縄文人たちを殺害したり、東へ北へとどんどん追い払っていったのです。そして最終的には、九州から関東北部まで支配することに成功しました。無論、日本海経由で、東北地方に侵入した中国の戦国難民もいたと思いますが、銅鐸が発見された地域と重なるのが、九州から北関東・信越地方までということになるため、便宜的に、この範囲を銅鐸によって結ばれていた銅鐸の民が支配した弥生時代の範囲とみなします。これには近年、長野県最北部の柳沢遺跡で発見された銅鐸・銅戈群が決定的根拠を与えました。



柳沢遺跡(やなぎさわいせき)は、長野県中野市大字柳沢字屋敷添にある遺跡。

東日本で初めて発見された、一括埋納の銅鐸・銅戈などの弥生時代遺物212点が、2014年(平成26年)8月21日に国の重要文化財に指定されている。千曲川の東岸、夜間瀬川との合流点の北側に広がる。範囲は南北800メートル、東西600メートルである。出典:フリー百科事典『ウィキペディア』

ここで注意したいのは、北部九州では、銅鐸とともに、甕棺と呼ばれる大きな甕に死者を埋葬する風習を早くから併せ持っていたことです。これは、甕棺墓制国家・吉野ヶ里遺跡からの銅鐸出土によっても裏打ちされました。しかもこの銅鐸が出雲・木幡家伝世銅鐸と同じ鑄型で作られていたことが判明したのです。要するに、銅鐸の大量出土地・出雲と同族だったのです。

この銅鐸は古い形式の銅鐸なので、恐らく九州で作られて、出雲まで運ばれたとみるのが自然です。銅鐸の民は九州から本州まで広い範囲に及ぶため、地域ごとに習慣の違いが見られます。共通項は言葉が通じ合えることです。これは古代史では同じ民族を意味します。

銅鐸の民の言語は、その出自から、ほぼ中国語系であったと推理されます。同時に古代史において、その民族が生き抜くためには共通の情報伝達手段、すなわち同族としての旗印が必要だったのです。それが銅鐸だったのです。ただし、彼らの居住範囲が広がると、諸般の事情から良い銅鐸が手に入らないところも出てきたため一律にはいかず、小銅鐸や土製品などの代用品も認められたと考えられます。

小銅鐸は全国的にも千葉県での出土例が最も多く、千葉県を代表する遺物の一つとなっているが、鱗（ひれ＝体部の側面に付く板状の部分）をもち、大型の銅鐸を忠実に模した形状のものと、鈕（ちゅう＝上の環状の部分）の断面が丸く鱗が省略された形状のものがある。前者は弥生時代後期の遺構から、後者は古墳時代初頭の遺構から出土することが多い。



文脇遺跡（袖ヶ浦市野里）の小銅鐸（上図）は、高さ10.8cm、最大幅5.8cm、重量124gあり、鱗をもたないタイプとしては比較的大きい。文脇遺跡14号土壌出土一括遺物（ふみわきいせきじゅうよんごうどうこうしゅつどいっかついぶつ）

千葉県の小銅鐸

No.	遺跡名	所在地	出土状況	高さ(cm)	鈕 鱗	分類	廃棄時期	備考
1	大井戸八木	千葉県君津市大井戸	土壌墓	9.5	有 無	C	弥生後期	土壌墓、銅釧・管玉・勾玉
2	中越	千葉県木更津市大久保	住居跡	6.4	有 無	C	古墳出現期?	内突帯、有孔石製品付(舌か)
3	文脇	千葉県袖ヶ浦市野里	木棺墓	10.8	有 無	C	弥生後期	内突帯、管玉・小玉
4	水神下	千葉県袖ヶ浦市奈良輪	旧河道	6.3	有 無	C	弥生末~古墳出現期	銅鏡・石製垂飾品伴出
5	天神台	千葉縣市原市村上	住居跡	6.8	有 無	C	古墳前期	下部欠失再加工か
6	川焼台1号	千葉縣市原市草刈	住居跡	12.3	有 有	B	弥生後期	突線鈕、袈裟襷文
7	川焼台2号	千葉縣市原市草刈	住居跡?	9.8	有 有	B	古墳出現期~前期	突線鈕
8	草刈I区	千葉縣市原市草刈	住居跡?	5.0+	無 無	C	古墳前期?	内突帯
9	草刈H区	千葉縣市原市草刈	方墳周溝内土壌	5.9	無 無	C	古墳前期古段階	朱壺伴出

上記以外

福岡県 11 佐賀県 1 大分県 2 熊本県 1 徳島県 1 香川県 1 鳥取県 2 岡山県 3 福井県 1 石川県 1
 兵庫県 2 大阪府 4 滋賀県 2 三重県 2 愛知県 2 静岡県 5 神奈川県 3 東京都 2 群馬県 1 栃木県 1

全国の銅鐸出土数と銅鐸文化圏

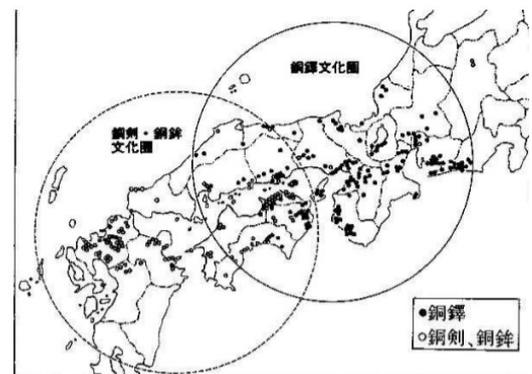
全国の銅鐸出土数

国別	出土数	I	II	III	I + II + III		IV
		菱環鈕式	外縁付鈕式	偏平鈕式	[聞く銅鐸]		突線鈕式
出雲	50	1	37	10	48		
摂津	34		12	14	26	7	
淡路	15	1	5	2	8	1	
河内	18		1	11	12	4	
大和	19		7	6	13	5	
紀伊	38		3	13	16	14	
讃岐	20		4	7	11	1	
阿波	41		3	22	25	8	
近江	36		3	2	5	22	
三河	28		1	1	2	11	
遠江	29		1		1	27	
その他	135	2	32	38	72	43	

- ・国別で出土数の多い地域(≥15)のみを示した。うち型式の判明分をI～IV式に分類。
- ・I～III式およびIV-1式：「聞く銅鐸」、IV-2～IV-5：「見る銅鐸」 [佐古和枝氏作成の分布図より]

銅鐸について言えば、出雲が侵略を受けたので、その銅鐸勢力が逃げていったのが、近畿地方であると考えられます。これまで言われてきた銅鐸文化圏（下図）というのは、出雲の銅鐸文化圏が敗れたあとの勢力図だったと考えられます。

その頃は出雲王朝の時代に当たります。出雲王朝はいつ頃なのでしょう。銅鐸というのは紀元前2世紀～紀元後2世紀末頃までの約400年間が銅鐸時代です。これが出雲が中心の時代であったと考えられます。



●「歴博」の縄文——弥生時代移行論

国立歴史民族博物館（歴博）はわが国の歴史学の研究をリードする研究機関で、弥生時代開始五〇〇年遡上説を発表した研究・展示施設です。これを前提とした弥生時代論が現状です。しかし年代不詳の縄文時代後期の土器の年代測定をして、それが紀元前九～一〇世紀頃で、だから弥生時代がそこから始まったといわれても困っている研究者もいます。

前述のように、水田稲作開始は弥生時代の物差しにはなりません。大陸からの移住者がもたらした青銅器文化の始まり時期とは全くかけ離れています。この背景には、「漸進的

な弥生文化発展段階説」を唱える考古学者主導の弥生時代論にあります。「歴博」などが編集・発行した『縄文人 VS. 弥生人』（二〇〇五年）がそれを裏付けています。弥生時代論に関する対談が載っていて、「縄文系主体説」VS.「渡来系主体説」のくだりに集約されているので、それを引用させていただきます。

篠田謙一氏（現：国立科学博物館館長）が「考古学者からすれば、弥生時代の黎明期を築いた主役はもう、圧倒的に縄文系の人々だったということになるわけですね」というと、藤尾慎一郎氏（歴博研究部助教授）は「ええ、そうです。それと同時に弥生文化の形成についても縄文系の人々が主体となってゆっくりと渡来系の文化を受け入れていったと考える考古学者が多いのです」と述べています。これに対して、弥生時代を築いたのは、大陸からの少なからぬ渡来人だとする「突発的な短期間の弥生文化成立説」が、おもに人類学者から提起されています。

古代史上の時代変化は、今日の世界情勢一つとっても、前述した中国の歴史を見ても、民族紛争抜きに考えられないことから、後者の「急激な時代変化説」に軍配を上げざるを得ません。民族紛争なき古代史像というものは、現実離れした無味乾燥な理想論に過ぎないと考えるからです。

次に、奈良時代以前の日本の古代史を知るうえで重要なポイントをおさらいします。

すなわち、「日本の支配者として君臨してきた天皇家の歴史は、近畿の奈良で始まり、以後ずっと近畿で続いてきた」とする考え方（近畿天皇家一元論と呼ばれる）は、文献や出土物などをみても現実的ではありません。

わが国の古代史は、縄文時代、弥生時代、古墳時代という大きな時代の流れで区分されています。実は、これら三つの時代の境目には時間的・空間的にみて強烈な折れ曲がりが存在します。地震に例えれば、巨大断層のようなものです。

わが国の弥生時代と同時代の客観的な記録は、当時の中国の歴史書のほかにはありません。中国は文字文化の先進国であり、「歴史の記録大国」ともいわれます。文字による記録は今から三・四〇〇〇年も前の殷の時代の甲骨文に遡ります。中国史書をもとに多くの歴史家たちが日本の古代史の立論をしてきました。その方法は正しかったのですが、中国史書と日本の歴史をどう比較し解釈するかの違いによって、結論がまったく異なっていました。

後代八世紀初頭の『古事記』、『日本書紀』が現存する日本最古の歴史書として最重要なのは当然のことです。しかし、中国史書に載っているのに、『記・紀』に出てこないことが実に多いのです。有名な「女王卑弥呼」も「倭の五王」も登場しません。日本古代史が“百家争鳴”になる理由がそこにあります。中国の史書を自説に都合よく結びつける心理が働くからです。大切なことは、先入観、固定観念、思い込みを排除することです。まして、原文改定などはもっての外ですが、これが実に多く見受けられます。

●奈良時代以前の日本の首都は太宰府だった

「筑紫時代」これが理解できるかできないか、しかし残念ながら、これを理解できる人は少ないのが現状です。教科書等で、「日本の首都は、大和（奈良）から始まった」などと漠然と教えられているからです。

これに対し、古田武彦氏は、著書の中で、日本の建国は筑紫（福岡県）の博多湾沿岸で始まり、奈良時代までは首都も筑紫にあったことを具体的に説明しています。

これが“九州王朝”と呼ぶべきわが国の原初の代表国家であり、奈良時代開始まで大陸とも外交関係を結んでいました。近畿天皇家の大和朝廷は、いわゆる神武の東征に伴って始まった国家であり、はっきり言うと九州王朝の“分家”に相当します。

しかし、本家九州の没落に伴ってこれを併合し、七〇一年（大宝律令開始：大宝建元）の平城京の発足によって、初めて近畿天皇家が正式に日本の代表権を奪取したのです。と述べています。近畿という言い方も此のときからとなります。

同氏の著書を参考にさせていただいた上で、自説の弥生時代像を、次の四点に的を絞ってまず説明します。

▽中国の史書は客観的事実に基づいて書かれている

▽時間的空間的諸条件が九州でないと理解不能である

▽「倭国の乱」は天孫族による北部九州の銅鐸の民との征服戦争だった

▽そして現実に九州にしか存在しない古代首都地名が数多くあることです。

●『三国志』魏志倭人伝から導かれる博多湾岸近辺

日本古代の首都所在地決定は、『三国志』魏志倭人伝に登場するいわゆる邪馬台国（氏は邪馬壹国が原文の表記であるとしている）の所在地論に左右されます。今日、主な学者がほとんど近畿説であり、それに追従するマスコミによって、近畿説ばかりが有利に報道されてる。との見方があります。

しかし、古田氏が『三国志』全体に登場する一五九個の「里」数値や方角、測定方法などを綿密に分析した結果、通常知られている「漢・唐の里数値」とは異なった、異例の「短里」（一里約七六メートル）が採用されていたことが判明しました。そこから導かれた卑弥呼のいた女王国は、博多湾岸に近い福岡市とその周辺だったのです。ここが女王国時代の首都であり、九州王朝が強大になるにつれ、最終的には内陸に入った太宰府が首都として確立し、ここが奈良時代以前の長期にわたった日本の政府所在地だったのです。

日本の表玄関が九州であったことは歴史的・地理的条件からも必然です。天孫族は朝鮮半島南部から出陣し、古代倭国の北部九州を侵略したと考えるのが、諸条件をかながみて自然の流れです。つまり、対馬、壱岐を経由すればすぐ目の先が博多湾岸です。その入口に志賀島が突き出しています。この島に初期天孫族国家の首都（司令部）があったと考えられます。

その根拠はまず、志賀島金印です。紀元五七年に、後漢の光武帝が倭国からの朝貢に対し金印紫綬を下賜したことが『後漢書』「倭伝」に書かれています。外交上の最重要事物が、政権の中枢部に置かれたのはごく当たり前のことではないでしょうか。漢の皇帝が倭国の代表権を持つ国家として、委奴国に対してお墨付を与えたことにほかなりません。

この委奴国の事と考えられるのが、二中歴（年代歴）に書かれています。この中には継体から大化までの31の年号が書かれています。その最初の説明に、年始五百六十九年でそのうち無年号が39年あって、継体（517年）が始まったと書いてあります。

「原文：年始五百六十九年内廿九年無号不記支干其間結繩刻木以成政」
始まって569年と書いてあります。継体が517年ですから、569年遡ると、517-569=▲52年（紀元前）なります。つまり紀元前52年が九州王朝が生まれたと考えることができます。まだこの時期に列島を支配できていなくとも、倭国としての金印国家（漢委奴国王印）の委奴国が、生まれてきたと考えられます。

ちなみに、この印の正しい読み方は、教科書で習った「漢の委の奴の国王」ではなく、「漢委奴国王カンノイド・イヌコクオウ」が正しいことは、証明されています。「漢の委の奴の国王」のような、三段読みは古代中国皇帝は採用していなかったのです。「奴国」にこの金印を送るならば、「漢奴国王カンノヌコクオウ」でなければおかしいのです。「奴国」はたくさんある倭国の中の一小国に過ぎないからです。そんなところに漢の皇帝がわざわざ国家と認める最高位の金印を贈るはずがありません。

後漢は「委奴国」を草創期のわが国の代表権を持つ中心国家として承認したのです。「委」の意味は、“したがう、すなお、おだやか”という従順を意味する文字です（『失われた九州王朝』による）。これに対して、漢に対して敵対し続けた北方騎馬民族には、「匈奴」と名づけました。「匈」は“たけだけしい、さわがしい”の意味です。凶暴という言葉はよく知られています。わが国に対して「委」を用いたのは、漢の皇帝がそれだけ信頼を置いた証しです。

以上のように、漢字は断定の言語、政治の言語とも言われるように、文字の順序関係をきちんと決定し、曖昧さを許さない言語なのです。日本語のように、間に助詞じょしを入れて遠まわしに表現することを嫌う言語です。志賀島の高台は、博多湾とその周辺を見渡せる絶好の場所であり、委奴国は漢の後ろ盾をもらった軍事国家として、国全体を防衛し、周辺の動きを絶えず監視しつつ勢力を蓄えていたのです。

●「倭国の乱」は北部九州内陸部の銅鐸の民との征服戦争

九州の銅鐸国家群は銅鐸と甕棺によって象徴される民族共同体だったのです。この国家群は、出雲を中心とする中国地方、あるいは、四国地方の銅鐸国家群とも連合体を形成していました。この九州・出雲連合国家が、紀元前一世紀ごろ、天孫族によって博多湾岸で武力侵略を受け、この地で銅鐸国家側は大打撃をこうむり、敗北しました。この戦いの休

戦交渉において、天孫族側は強力な武力の脅しをちらつかせつつ、九州北部の博多湾岸の割譲を勝ち取りました。この事件が有名な「国譲り」です。それに基づいて、天孫族側は博多湾岸と、糸島半島周辺への軍隊の進駐を行ったのです。これが名高い「天孫降臨」という事件でした。

ここで、「天孫降臨」について簡単に説明します。

「天孫降臨」と聞いて宮崎・鹿児島県境の高千穂峰の出来事として思い起こされる方が多いと思いますが、これは幕末から明治維新の主導権を握った薩摩・長州藩による自らの権威付けのための史学（薩長史学とも言う）の産物です。

人が住めない南の果てのそんな高い山にわざわざ攻め込むでしょうか。現に古代遺跡は何もありません。本当の「天孫降臨」は史実であり、すなわち、『古事記』の正しい読み方は、「筑紫の日向の高千穂のクシフルの峰」でした。これは博多湾や糸島半島に近い高祖山連峰に実在し、そこには日向山・日向峠があります。

この出来事で銅鐸国家側が、北部九州の表玄関を明け渡したわけですから、銅鐸の民にとって重大な損失だったのは言うまでもありません。ここで気を付けなければならないのは、この戦いで天孫族が北部九州全域を占領したのではないことです。九州の入口の重要拠点を占領したということです。

したがって、甕棺などの墓制は銅鐸民族との宥和政策として巧みに共有していたとみられます。その後、天孫族はこの地域を中心として、約二〇〇年余、着実に力を蓄えて強大となり、北部九州内陸部への侵略のチャンスをつかっていたのです。

以後、内陸を中心とした銅鐸の民とは共存関係にあったのですが、後漢との国交をめぐる交渉権、占領地の境界線、あるいはお互いの権利などをめぐって小競り合いが絶えなかったのです。吉野ヶ里の銅鐸国家の甕棺で発見された「首なし遺骨」がそれを物語っています。そのころ、天孫族の傍若無人な振る舞いに恐怖を抱いた各地の銅鐸の民は、集落の周囲に一斉に環濠を巡らし、天孫族の襲撃に備える必要に迫られた、と考えられます。

しかし、「生口」などの貢物をそろえ、巧みな外交戦術を展開した天孫族は、後漢との交渉権をほぼ手中にしました。その後中国の後ろ盾を勝ち取った天孫族の覇権主義はとどまることを知らず、二世紀の後半、ついに銅鐸国家側への一斉蜂起を開始しました。約半世紀の戦いの後、吉野ヶ里などを含む銅鐸国家群を完全征服したのです。

これが最終的に女王卑弥呼が登場しピリオドを打つ「倭国の乱」にほかなりません。三世紀半ばまでに、北部九州の銅鐸国家群が土器などの家財道具を環濠に遺棄し、なぞの“蒸発”を遂げていることがそれを裏付けています。『日本書紀』では、この戦いを「神功皇后の筑後平定説話」として、あたかも近畿の天皇家による筑後征伐であるが如く捏造され、一〇〇年も時代を遅らせて書かれています。

●古代首都地名が林立する太宰府

結論から言いますと、倭国の乱に勝利した九州の天孫族が最終的に首都を営んだところが太宰府です。さて、太宰府とはいったいどんな意味を持つのでしょうか。偉大なる宰相が居住する役所そのものを表しています。太宰とは、本来「百官の長」を表します。それが七世紀末に近畿天皇家が九州の王朝を滅ぼしたあと、九州の一地方役所に格下げされてしまったのです。もともとは、近畿は九州の分家だったのです。分家が本家を滅ぼしたのです。

この太宰府政庁あとには、「都督府古址」なる石碑が堂々と建っています。九州王朝を否定する人々には誠に都合の悪い石碑だと思えます。『日本書紀』にでてくる「筑紫都督府」の意味をあまり考えないで、そのまま作ってしまったのでしょうか。

「ここに都がありました」と言っているのと同じです。「都督府」とは、都督がいた中央政庁のことです。この名が残っているのは、全国でただ一カ所、太宰府だけです。いわば、総理大臣官邸のようなものです。

では「都督」とは何か。それは、五世紀に「南朝」の宋（四二〇～四七九年）に使者を送った「倭の王」が、中国の天子から与えられた称号だったのです。太宰府に君臨した九州王朝の王であり、讚、珍、斉、興、武という中国風の名称で南朝に使者を送った「倭の五王」として知られています。この王＝都督のいたところが「都督府古址」の地にほかなりません。

「都督府古址」の向かって右奥に「紫宸殿」という字地名があります。また、「都府楼」のつく駅名はJRと西鉄の双方に隣合うように現存します。都府楼とは、都督府の役人が出入りする官庁名のことでしょうか。さらに、「大（内）裏」「朱雀門」などの地名も残っています。このように明らかな首都地名をもつ九州王朝を無視した形で、成り立っているのが、わが国の不思議な古代史学なのです。

九州王朝とは、天孫族が「倭国の乱」によって、北部九州を中心とする銅鐸民族国家群を完全征服して成立した国家であり、近畿天皇家の祖先の国家です。好戦的な軍事国家の色彩が強く、卑弥呼女王で知られる邪馬台国（正しくは邪馬壱国）がその始まりです。

以後、奈良時代までつづく九州王朝の時代は、「筑紫時代」と呼ぶのが真実の姿です。初期九州王朝の膨張政策の一環として、いわゆる「神武の東征：いわゆる神武東遷ではありません」が決行され、大和の完全制圧を行う過程で、巨大古墳群の築造に着手します。これが近畿天皇家の全盛時代の幕開けであり、暗黒の古墳時代の始まりとほぼ一致します。

次に、FRONTIERS 2023.12.6 NHK BS 放送により DNA 解析と考古学の立場から見ると、古墳時代は、3世紀半ばから7世紀ごろ、権力者によって各地に、おおきな古墳が作られて日本が国家として一つにまとまり始めた時代と考えられます。

(金沢大学助教 考古分子生物学 覚張 隆史氏によると)



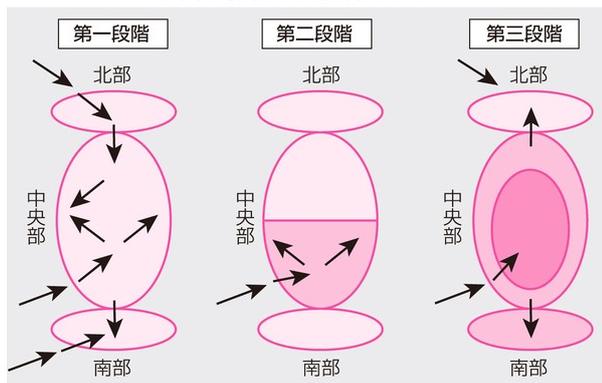
注目したのは、ここ石川県金沢市岩出町で60年前に骨が見つかった庶民の墓だ。これまで謎だった庶民のDNAだ。ついに2021年解析が実現した。研究グループでは、縄文時代の人骨9個体、弥生時代の人骨2個体、古墳時代の人骨を新たに3個体を分析しました。3つの時代の人骨のゲノム変化がどのように進んでいったのか検証した。

縄文人、弥生人、古墳人、現代日本人のグラフは上図のとおりとなった。

古墳人には弥生人にはなかった「第3のDNA」がある。

解析結果を見て驚きました。これをどう解釈するのか。間違いじゃないかと試行錯誤・確認をしてきて、これは二重構造というものだけで説明するには限界がある。新しいモデルを考えなくてはいけないと思いました。

日本列島人の形成モデル



斎藤成也著「日本列島人の歴史」を基に作成
(北部=千島列島・樺太・北海道
中央部=本州・四国・九州 南部=南西諸島)

古墳時代に、現代日本人の特徴が形成されていったのではないかと。という「三重構造モデル」というものを提唱して行くことが重要なのではないかと考えています。(左図)

研究者たちが考える日本人のルーツとは、はじめに日本列島にたどり着いたのはアフリカから東アジアに最初やってきた集団だった。その後、海に隔てられて1万年以上も孤立。世界に類を見ない縄文文化が生まれた。

そして弥生時代と古墳時代に、これまでの常識を遥かに上回る「第二、第三」の人の波

が日本列島にやってきた。そんなDNAが混ざり合うことで日本人の礎が出来た。

(篠田謙一氏によると) 現代日本人というのは、弥生時代から始まった大きな人の流れが、もう少し長い間、古墳時代まで1000年・1500年と続くことによって今の私たちが持っている遺伝子が完成したんだろうと考えるようになっていきます。古墳時代に何が起きたのかすごく興味があります。(了)

参考

【古代DNAが解き明かす「日本人」より】(FRONTIERS 2023.12.6 NHK BS)

金沢大学助教 考古分子生物学 覚張隆史氏

国立科学博物館 館長 自然人類学 篠田謙一氏

【銅鐸民族より】：臼田篤伸(ウスタクノブ)：歯学博士。ガンの細胞培養学専攻。歯科医業のかたわら、風邪ならびに古代史についての調査・研究を行う。